

契約結婚のはずなのに、  
殿下の甘い誘惑に  
勝てません！

綾瀬ありる

ARIRU AYASE



ノーチエ文庫



### クレア・エイベル

公爵令嬢。

エグバートの婚約者候補筆頭を  
自負していた。



### ブリジット

アンジェリカの部屋付きの侍女。  
有能だが、恋愛面では少し夢見がち。



### デイヴィット・ヴァーノン

アンジェリカの次兄。  
近衛隊に所属しており  
エグバートと親しい。



### エドムント・フォン・ アーレンス

テオバルトが重用する  
シルト帝国の子爵。  
エグバートとは旧知の仲。



### アレクサンドラ

シルト帝国の皇族。  
エグバートとは旧知の仲。



### テオバルト

ロイシュタ王国の隣、  
シルト帝国の次期皇帝。  
エグバートの親友で  
アレクサンドラの兄。

## 登場人物紹介



### アンジェリカ・ヴァーノン

中堅貴族にあたる伯爵家の令嬢。  
突然エグバートに求婚される。  
思っていることが顔に出やすい。



### エグバート・ロイシュタ

ロイシュタ王国の王太子。  
基本的に穏和だが、恋愛面で難攻不落なため、  
「氷の王子」と令嬢たちに噂されていた。

## 目次

契約結婚のはずなのに、  
殿下の甘い誘惑に勝てません！

7

初の外遊先なのに、  
どうやら歓迎されていないみたいです！

101

番外編

ご契約は慎重に

325

書き下ろし番外編

王太子殿下は

335

かわいい妻の誘惑を待ちきれません

契約結婚のはずなのに、

殿下の甘い誘惑に勝てません！

## 第一話 契約結婚のススめ

「——さあ、行きましょうか、僕のかわいいアンジェリカ」

優しい微笑みを浮かべた青年が、その言葉と共に、白い手袋に包まれた手を差し伸べてくる。淡い金髪に翠玉の瞳をした甘い顔立ちを、濃紺の正装がきりりと引き締めていて、惚れ惚れする貴公子ぶりだ。

相対するアンジェリカのドレスもまた、同じ色をしている。足元へ向かうにつれて徐々に紫に変化するグラデーションと、星をちりばめたような銀の刺繍が美しい。初めて見た時には、あまりの美しさにため息が漏れた。仕立ての良いそのドレスは、肌触りも着心地もとても良くて、着せられている最中もうっとりしたものだ。

流行の形をしたそれは、胸元がかなり開いている。アンジェリカの胸は大きくもないが小さくもない、中途半端なサイズだが、今日はコルセットで寄せて上げてもらい、普段よりも深い谷間が作られていた。その上で煌めく首飾りには、深い色をした大きな翠

玉がはめ込まれている。

何から何まで目の前の青年が用意してくれたものだが、一体どれほどの値がつくものなのか、考えるのも恐ろしい。

少し癖のあるアンジェリカの赤い髪は、今日は複雑な形に結い上げられている。流行に従って遊ばせた後れ毛が首筋をくすぐるのがむずがゆい。緩く頭を振って、アンジェリカはため息をついた。

どう見ても、ドレスにも装身具にも負けている。もう少し、美しい容姿をしていたら、堂々としていられたかもしれないけれど——

「どうしたの？」

「あ、いえ……申し訳ございません」

ほんやりとそんなことを考えていたアンジェリカは、かけられた声にはっとして意識を青年に戻す。青い瞳を瞬かせ、躊躇いがちに手を伸ばすと、白い手袋がそれを受け止めた。

うやうやしく持ち上げられた手の甲に口づけが落ちる。それに動揺する間もなく、相手は追撃をかけてきた。

やんわりと、それでいて逃がさないと云わんばかりに引き寄せられ、抱き締められた

のだ。うろたえたアンジェリカの耳に、囁くような声が吹き込まれた。

「緊張している？」

「いえ——あ、ええ、そうですね……」

隠しても仕方がない。アンジェリカは、そっと息をつく。

緊張しないわけがない、と思う。これから目の前の青年——ロイシユタ王国第一王子にして王太子であるエグバートの婚約者としてお披露目されるのだ。

それを意識した途端、心臓がどくどくと早鐘を打つ。震える指先を、エグバートが優しく包んだ。そして柔らかな微笑みを浮かべ、蕩けるような目つきでアンジェリカの顔を覗き込む。

それがあまりにも自然に行われるものだから、心臓に悪い。

「大丈夫だよ、かわいいアンジェリカ——何も心配はいらない、僕に全て任せて」

優しい声が耳に届く。頬を撫でられ、熱っぽいまなざしを向けられて、アンジェリカの鼓動はさらに跳ねあがった。

氷の王子さま、と呼ばれていたエグバートのこんな姿を、誰が想像するだろうか。よく似た他人だともうかもしれない。高鳴る胸を押さえながら、そんな馬鹿げたことを考えてしまう。それは現実逃避だったかもしれない。

（まるで、物語の登場人物にでもなったような気分）

近頃流行りだという物語を思い出して、アンジェリカはくすりと笑う。すると、エグバートが蕩けるように笑った。

この調子なら、周りの人々には、エグバートが婚約者に夢中になっているように見えるだろう。

（全く、演技がお上手で）

アンジェリカの中の、どこか冷静な部分がそう考えた。

——そう、演技だ。

この婚約も、結婚も、全て契約の上でのことなのだから。

早鐘を打つ心臓を抑えて、アンジェリカは息を吸い込んだ。どうにか自然に見えるよう微笑みを浮かべると、今度はエグバートがくすりと笑う。

——さあ、一世一代の大舞台だ。

目の前の扉を見つめて、アンジェリカは大きく深呼吸した。



アンジェリカ・ヴァーノン伯爵令嬢である。

ヴァーノン伯爵家は、歴史ある家柄だ。しかし、当代のヴァーノン伯爵は宮廷勤めをしているものの、とりたてて要職に就いているわけでもなく、領地が豊かなわけでもない。いわゆる普通の——言ってしまえば、中の上程度の貴族だ。

ただ、父である伯爵は堅実な領地運営と飾らない人柄で知られ、領民の信頼は厚い。

アンジェリカには兄が二人おり、長兄は王宮に詰めることの多い父に代わり領地を管理している。最近結婚したばかりの妻と二人、遠方のヴァーノン領にある邸が生活拠点だ。

次兄は騎士として王宮に勤めている。なんでも、第一王子と年齢が同じとかで重用され、近衛隊に所属しているという。家に帰ることが少なく、アンジェリカは兄妹だというのに兄の仕事について詳しいことを知らない。時たま差し入れに行くこともあるが、それくらいだ。

寒さの抜け切らない春の日、その次兄——デイヴィットが唐突にとんでもない爆弾を

投下した。

珍しく家に戻った兄は、アンジェリカの部屋を訪れると、突然こう話し始めたのだ。

「アンジェリカ、おまえ確か十八になるよな」

「ええ……それがどうかした？ まさか、縁遠い妹を憐れんでなたか紹介してくださるの？」

「そういう——うーん、まあ、そうなるのかなあ……」

デイヴィットがうーん、とか、ええと、とか、唸り声をあげ始めたので、アンジェリカは訝しむ。冗談のつもりだったのに、次兄の目は真剣だ。

どうしたのだろうか。頬をくすぐる赤毛を払って、アンジェリカは考えた。

十六で社交界入りをし、十八ともなれば婚約者の一人や二人——いや、二人いてはおかしいか。とにかく婚約者がいるのが貴族令嬢としては普通である。が、残念なことにアンジェリカはその普通に当てはまらない。

彼女自身に、問題があるわけではない。実際のところ、婚約者はいたのだ。同じ伯爵家の嫡男で、父と同じく王宮で文官勤めをしていた二歳年上の青年である。しかし彼は、アンジェリカが社交界入りする直前、事故でこの世を去ってしまった。

この場合、次の後継者に婚約者がスライドする、というのが通例である。彼の場合、

弟がいた。ただ、その弟が問題だった。当時十五歳だったアンジェリカに対し、婚約者の弟は五歳。さすがに十も年の離れた夫との結婚を待つというわけにもいかず、アンジェリカの婚約は白紙状態となった。

父はアンジェリカに良い嫁ぎ先を、と探してくれたが、そうそう見つかるものではない。アンジェリカ自身、何となく気乗りしないまま時は過ぎ、気付けば二年の時が流れていた。

そんな事情を思い出しつつ、兄へと意識を戻す。すると、視線を逸らし、アンジェリカと同じ赤い髪をかき混ぜながら、デイヴィットがため息をついた。できれば言いたくない、というのが透けて見え、アンジェリカは首を傾げる。

デイヴィットの紹介ならば、おそらく相手は騎士だろう。近衛隊このえなら、出身はほとんどが貴族だ。一代限りとはいえ騎士爵の地位だつてある。

嫁いぎ遅れ目前のアンジェリカにとって、ありがたい話だ。——まあ、父が何かは知らないが、彼女と年も家柄も釣り合いが取れて婚約者のいない好青年など都合よく存在しないのだから、そろそろ現実を見てほしい。

「こんなこと、俺の口から言うのはどうかと思うんだけど」  
 デイヴィットが重い口を開く。どうやら話す気になつたらしい。

「——結婚、してほしいんだ。その……エグバート殿下と」

兄の口から飛び出したのは、予想もなかった名前で、アンジェリカは目を瞬またたかせた。

「……冗談、よね？」

「俺も、冗談だと思いたい」

デイヴィットがため息をつく。

「まあ、詳しい話は殿下が直接なさるそうだ。というわけで、王宮におまえを連れてこいと仰おほせでな」

苦い顔でもう一度ため息をつく兄を見つめて、アンジェリカは引きつった笑みを浮かべた。

「やあ、よく来てくれたね」

「……お呼びに従い参上いたしました」

薄紅色の薔薇ばらが満開を迎えた王家専用の庭に、エグバートはアンジェリカを呼び出した。ここであれば、人の目を気にしないでもいい——ということなのだろうが、そんなことを気にするぐらいなら最初から呼ばないでほしい。

そんなアンジェリカの心情などどこ吹く風、といった調子で、エグバートはアンジェ



リカの背後に目を向ける。

「ああ、デイヴィット。おまえは下がっていいよ。アンジェリカ嬢と二人だけで話をさせてほしい」

「はっ……し、しかし……」

妹を氣遣ったのか、エグバートを氣遣ったのかは分からないが、デイヴィットが難色を示す。しかし、エグバートの強い視線を受けてしぶしぶ頷いた。

「では——あちらで待機しております」

姿は窺<sup>うかが</sup>えるが、話の内容は聞こえない。そんな絶妙な位置を指し示す。エグバートが頷いたのを見て、デイヴィットはちりと妹に目をやると下がっていった。

「さて、デイヴィットから話は聞いているでしょうか？」

「……あの、頓珍<sup>とんちん</sup>漢<sup>だん</sup>な話でしょうか」

「そう、その頓珍<sup>とんちん</sup>漢<sup>だん</sup>な話だ」

アンジェリカ渾身<sup>こんしん</sup>の嫌味を軽く受け流して、エグバートは続けた。

「アンジェリカ嬢。悪い話ではないと思うのだけど？ きみは不幸にも婚約者を亡くし、適齡期を迎えた今も嫁ぎ先は決まっていない」

「……まあ、他人から言われると腹が立ちますが、その通りです」

「そして僕も、そろそろ結婚相手を決めろとせつつかれている」

そこで、エグバートは表情を曇らせた。翠玉<sup>すいぎよく</sup>の瞳が憂<sup>うれ</sup>いに翳<sup>かげ</sup>る。アンジェリカは小首を傾げた。

「もうじきまた社交の季節を迎えます。伝統にのっとって、仮面舞踏会でお相手を——」

「それだよ——」

エグバートが頭<sup>かぶり</sup>を振った。

「あの馬鹿げた伝統のせいで、仮面舞踏会ではあちこちの令嬢から追いかけまわされる」  
 そう口にしたエグバートの瞳は、冷めきっていた。なるほど、仮面舞踏会で未来の王妃を決めるといふ非効率的だがロマンがあるともいえるこの国の伝統を一蹴するとは、氷の王子さまと言われるのも頷ける。

エグバートに関する噂話を思い出して、アンジェリカは得心した。難攻不落の氷の王子——というのが、世間の令嬢方のエグバートに対する評価なのだ。

「今年こそ決めろ、と父上からも言われていてね……でも、あんな舞踏会で相手の何が分かんと思う？ たった一言二言話をして、それでダンスをして？ そんなことで生涯添い遂げる相手を見つけれだなんて……馬鹿げていると思うでしょう？」

エグバートが、アンジェリカの手を取った。そうして、じりじりとにじり寄ってくる。

「そこで、きみのことを思い出した。うん、きみは僕を追いかけてまわしたりしないし、変な小細工を弄<sup>う</sup>したりもしない。それどころか、ほら、僕から逃げようとさえしている」先程からじりじりと後退していることを気取られていたらしい。くすり、と笑われて、頬が赤くなる。

「うん、それでいい。だからこそ、きみと結婚したいと思ったんだよ」

「それでいい、とは——」

「まあ、よく考えてみて？　僕は、これで結婚相手を探せとせつつかれることもなくなる、妙な令嬢と結婚せずに済む。きみは、嫁<sup>よめ</sup>き遅れと陰口を叩かれるのを回避して、最高の結婚相手を見つけられる。それに、伝<sup>でん</sup>統<sup>とう</sup>にだ<sup>だ</sup>つての<sup>の</sup>つと<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>いる、<sup>と</sup>言<sup>い</sup>え<sup>る</sup>」

一呼吸おいて、エグバートははっきりと口にした。

「アンジェリカ嬢。僕と結婚してほしい」

アンジェリカはしばし考えた。確かに、お互いにとつて利益のある話ではある。しかし、ここでアンジェリカの胸中をよぎったのは、埒<sup>らち</sup>もないことだった。

——殿下は私のことが好きだから結婚したいわけではない。

亡くなった婚約者とのことは、家が決めたもの。愛があつたわけではない。婚約が決まったと、父から告げられただけであった。

つまり——初めて受けた求婚が、利益だけを求めるものだということが、少しだけ切なかつた。それだけだ。

アンジェリカは、目を閉じた。愛のない結婚など、普通のことだ。しかし、なぜ自分を選んだのだろう。その答えを見出そうと、考える。

現在、エグバートの結婚相手として取り沙汰<sup>さた</sup>されているのは、エイベル公爵家のクレア嬢だったはずだ。彼女も熱心にエグバートに言い寄っているようだし、家格も申し分ない。

だが、こんな提案をしてくるからには、クレア嬢を王太子妃に据えるつもりはないのだろう。

エイベル公爵は随分な野心家だと、父が何かの拍子に言っていた。そのあたりに理由があるのかもしれない。

対して、自分とは言えば、まあ何の取り柄もない伯爵家の娘だ。父はとりたてて野心家ではないし、大それたことを考えそうな身内もない。

そこまで考えて、アンジェリカは苦笑した。

なるほど、令嬢たちが諦めるまでの短期間婚姻<sup>こんいん</sup>を結ぶための、扱いやすい駒、ということか。

(まあ、いいか……)

婚約者が亡くなって二年。自分から相手を探す気にもなれず、嫁き遅れ目前の身である。だったら、理由は何であれ望んでくれる相手に嫁ぐのも悪くない。

それに、とアンジェリカはちらりとエグバートの顔を見た。何があったとしても、彼は不誠実なことはいらないだろう。家族には隠し事が苦手な兄が、今回の縁談に際して王太子本人への不平不満を一切口にしなかったのだから、間違いない。自分はエグバートの笑顔の裏を読み解けないが、さすがに近衛の騎士には多少なりとも本性が知れているはずだ。

そう結論付けて、アンジェリカは静かに口を開いた。

「……分かりました。その話、お受けいたします」

「本当に？」

「ただし——」

そこで一旦言葉を切って、正面からエグバートを見つめる。

「事前に、いくつかお約束していただきたいのです」

アンジェリカの言葉に、エグバートは一瞬目を丸くした。次いで、破顔する。

アンジェリカの胸が一瞬ときりと音を立てた。

「いいよ、なんでも言うといい——なんなら、契約書を作ろうか」

そう言うと、手を上げて侍従を呼ぶ。紙とペンを持つてくるよう命じると、エグバートはアンジェリカの額に口づけた。そうして、アンジェリカの真っ赤な顔を見つめ、蕩けるような笑顔で言った。

「いいね、アンジェリカ。きみとあの舞踏会で出会えたのは、僥倖だった」

家に帰ったアンジェリカは、寝台に腰かけて今日のことを思い返していた。

契約に際して、アンジェリカが出した条件は、常識的なものだったと思う。

ヴァーノン家に過大な肩入れをしないこと、それに加え、契約中の費用はエグバートの個人資産を用いること。

ひとつめの条件は、家に迷惑をかけないためのものだ。安易に昇進や陞爵などすれば、妬み嫉みの対象になってしまう。アンジェリカが決めたことで父や兄たちを困らせたくない。費用のことは、おまけみたいなものだ。

そして、公式の場では仲睦まじい夫婦として振る舞うこと。

いきなり不仲説が流れては、契約した意味がない。私的なところではともかく、公の場では仲睦まじいところを見せた方が、お互いのためだろう。

さらに、契約解消にあたっては、事前に告知することをお願いした。既に自分の人生など半分以上は諦めた気分のアンジェリカでも、突然離縁すると言われてうろたえる姿など見せたくはない。

（さすがにそんなことはなさらない、と思うのだけれど）

あの時は、こんなことが自分の身に起こるなどとは思ってもなかった。エグバートと初めて言葉を交わした目のことを思い出して、アンジェリカは、ほうつとため息をついた。

——時は、一年ほど前に遡る。

その日、煌びやかなシャンデリアが下がる広いホールの一角で、アンジェリカは佇んでいた。

社交シーズンのちょうど真ん中の日に毎年行われる仮面舞踏会。

その舞踏会がいわゆる「王太子の花嫁選び」の場であることは、誰もが知っていて口にはしないこと。いわゆる、暗黙の了解というやつである。

なんでも、何代か前の国王がそうやって賢妃を迎えた、というので伝統化されたのだという。一国の王妃を決めるにしては、どうにもロマンチックがすぎる話だ。しかし、ロイシュタ王国中の娘の心を掴んで離さない恋物語として、今でも語り継がれている。

王宮主催の舞踏会だけあって、ホールには大勢の貴族たちの姿がある。誰もが趣向を凝らした仮面をかぶり、笑いさざめく姿は、普段とは違う高揚感に満ちていた。

アンジェリカは、父であるヴァーノン伯爵に伴われ、その場にいた。彼がアンジェリカをここに連れてきたのは、王太子を狙ってのことではない。それはさすがに高望みがすぎる。

アンジェリカは、ふう、とため息をついた。婚約者を事故で亡くしてから一年が過ぎている。喪に服していた彼女も、これ以上社交界デビューを先送りするわけにいかなかった。

父親は、どうやらここで良い縁を見つけてほしいと思っているようである。しかしアンジェリカはさっぱり気乗りがしない。亡くなった婚約者とは、家同士のつながりを求めていたのであって、特に恋とか愛とかそういうものがあつたわけではなかった。それでも、それなりに親しくしていた相手がいなくなったのだ。早々に「はい次」という気になれるものでもない。

挨拶回りに出た父には悪いが、もう少ししたら家に帰ってしまおう。近場にいた王宮の使用人らしき男性が差し出した盆から、度数の低そうなお酒を受け取ると、アンジェリカは壁の花となるべく移動した。

「あっ……！」

「おっと……失礼」

その途中で急ぎ足の青年とぶつかってしまったのは、何もアンジェリカがぼんやりしていたせいだけではないだろう。後ろを必要以上に気にしながら歩いていた青年もまた、前方不注意ではあった。

ぶつかった拍子にグラスから零れた酒が、青年の胸元を濡らしている。アンジェリカは急いでハンカチを取り出して濡れた場所を拭こうとした。

「申し訳ございません……」

「ああ、いや、大丈夫だから」

しきりに背後を気にしていた青年は、アンジェリカのその行動に少し慌てたようだった。それもそうだろう。色の濃い酒は、下手に擦れば染みが広がってしまう。やんわりと制されて、手を止める。

しかし、時既に遅し。白い上着にはしっかりと濃い紫の染みが広がってしまった。青ざめるアンジェリカを見て、青年は一瞬思案したようだった。

「ちょっと来てくれ」

有無を言わず手首を掴み、強引に連れ出す。宴のざわめきが次第に遠くなっても、

その足は止まらない。

「ま、待って……！」

必死に抵抗しようとするが、細身の割に青年の力は強い。アンジェリカの手を引いて、そのまま王宮の奥へ進んでいく。

あたりはすっかり静まり返り、<sup>ひとけ</sup>人氣がない。薄暗い廊下の壁を、月の光が青白く照らしている。どんどん進み、やがてとある一角にたどり着くと、青年は迷うことなく正面の扉に手をかけた。

「さ、入って」

「え、ここは……？」

王宮の奥といえは、王族の住まいだ。青年が何者なのかを理解して、アンジェリカは蒼白になる。ここは、自分のような者が立ち入っていい場所ではないのだ。

重厚な扉が、音もなく開く。まばゆい<sup>あか</sup>灯りが灯された室内は、一目で分かるほど煌びやかな装飾に満ちていた。

「いけません、殿下……！」

別に、何事か起きると思うほど自意識過剰ではない。だが、部屋に二人でいるところを見つかるだけでもまずい、ということくらいは分かっていた。

その程度のことは、当然理解しているだろうに、青年——王太子、エグバートは素知らぬ顔で再度入室を命じる。

そうなれば、アンジェリカとて拒みようがない。身分からいっても——そして、物理的にも無理な話であった。なぜなら、アンジェリカの手首は未だエグバートが握ったままなのだから。

「着替えるから、そこで待っていてくれ——逃げるなよ？」

後ろ手に扉を閉めて、ようやくエグバートはアンジェリカの手を離した。もはや観念してこくりと頷くと、指し示された椅子に浅く腰かける。

すぐ逃げ出そうと身構えているように見えたのだらう。そんなつもりではなかったが、仮面を外したエグバートが意地の悪い笑い方をするので、むっとしてしまう。

「殿下は、女性と過ごされたことがありませんか？」

その質問に、エグバートは首を傾げた。淡い金の髪が、部屋の灯りに透けてさらりと揺れる。そんな姿も絵になるものだ。代々の王族の中でも出色の美男子と言われるのも頷ける。

こんな時でなかったら、素直に称賛できるのに。アンジェリカは、内心そう思ったが

顔には出さない。

「この、夜会用のドレスというのはやっかいな作りをしております。こういう姿勢でしか座れないのです」

「なるほど」

得心がいった、とばかりに頷いて、エグバートはもう一度笑った。しかし、その笑みには先程の意地の悪さはない。うんうん、と呟きながら衣装部屋へ消える。

正直、逃げ出せるものなら逃げたい。しかし、約束してしまったからには逃げ出すのも業腹だ。それに、うっかり外に出ていく場面を第三者に見られたら、面倒なことになってしまう。

どうやら、自分とはことんツイていない人間らしい。はあ、とため息をついて、アンジェリカは部屋の中を見回した。

ぱつと見には、豪華絢爛に思えたが、よく見ると案外実用性を重視した部屋だ。ひとつひとつの家具は使い込まれている。

「へえ……」

しげしげと部屋の中を眺めていると、背後から笑い声が聞こえた。はつとして振り向くと、口元を押さえたエグバートがアンジェリカを見ている。上着を替えるだけかと思

えば、ラフな普段着に着替えていた。

「僕よりも、部屋の方が気になるか」

「い、いえ……失礼いたしました」

かしこまって答えると、また笑い声が上がった。よく笑うお方だ、と半ば呆れる。エグバートは隣の椅子に腰を下ろすと肩をすくめた。

「実を言うと、抜け出す口実を探していたんだ。助かったよ」

アンジェリカは逆に迷惑なのだが、王太子がそう言うなら頷くしかない。できればとつとこの部屋から退出し、何事もなかったような顔で父に帰宅の旨を伝えたい。

しかし、エグバートはまだアンジェリカを帰すつもりはないようだった。見る者の心を蕩かす笑みを浮かべ、おもむろに立ち上がる。

「何か飲む？」

壁際に設えられた棚から瓶を取り出すと、エグバートは振り返ってそれを掲げてみせた。緊張のせいかわ、喉が渴いでいたことに気が付いて、中身が何なのか確認しないうちにアンジェリカは「いただきます」と口にします。

——それを後悔したのは、翌朝になってからだ。

小鳥のさえずりに目を覚ませば、そこは見覚えのない部屋だった。頭が割れるように

痛くて、呻き声をあげる。

枕元の水差しに気が付いて、震える手で水を飲むと、やっと人心地つく。改めて部屋の中を見回しているところに、コンコンとノックの音、続いて若い女性の声が聞こえた。

「お目覚めでしょうか……」

びくり、とアンジェリカの肩が跳ねる。慌てて着衣を確認すると、いつの間にかきちんと寝間着を着せられていた。特に乱れた様子はなく、おかしいところはないように思える。

そうこうしているうちに、もう一度部屋の扉をノックする音がし、ほどなくがちやりとノブを下げる音がした。返答がないため、様子を見ようと先程の声の主が入室したのだろう。

「あ……」

お仕着せを身につけた侍女とおほしきその女性と目が合う。アンジェリカは一瞬身体をこわばらせたが、彼女は柔らかな微笑みを浮かべた。

「起きていらしたのですね。お嬢さま、お身体の方はもう……？」

「あ、え、ええ……あの、わたくし……？」

「昨日は驚きましたわ。殿下に呼ばれて参りましたら……なんでも、舞踏会で具合が悪

くなられたとか？ 部屋を用意するようにとの仰せで」

朗らかな声が、事情を説明してくれる。どうやら、殿下の部屋でいただいた飲み物がよくなかったようだ、とアンジェリカは遅れながら気が付いた。おそらく、酒精の強い飲み物であったのだろう。酩酊したところを介抱されたらしい。

「あ、ありがとうございます」

「いえ、お礼でしたら殿下に……と申し上げたいところなのですが、殿下は既に公務に出られておいで」

シャツ、とカーテンを開ける音がして、部屋の中が明るくなる。

「起きたら、ご自宅へお送りするようにとのことでした。ええ、もちろんきちんとご家族には説明させていただきます。ご安心くださいね」

そう言うと、侍女が胸をどんと叩く仕草をする。それがおかしくて、アンジェリカは思わず笑ってしまった。

——あの後は、大変だった。

アンジェリカは、あの日のことを思い出してくすりと笑う。夜のうちに連絡が行っていたとはいえ、父は青くなったり赤くなったりしていたし、兄は呆れた顔をしていたも

のだ。

だが、何事もなかったとついてきてくれた侍女が説明をしてくれたし、エグバートもメッセージを持たせてくれていた。それで、ようやく納得してもらえたのだ。

あれを二人の馴れ初めとするのなら、確かにエグバートの言う通り、伝統にのっとったことになる。

（それにしても、殿下に求婚されるなんて、これから大変ね……）

寝台から窓の外を見上げて、アンジェリカはため息を漏らす。

「私、うまくやれるのかしら……」

父には、エグバートとデイヴィットが話をしてくれることになっている。それから巻き起こるだろう騒ぎを予想して、アンジェリカはもう一度大きなため息をついた。

エグバートと契約を交わして二か月ほど過ぎた頃、ロイシュタ王国は社交シーズンを迎えた。その間、何度か兄への差し入れを口実に王宮に行ったり、反対にエグバートがヴァーノン家をお忍び訪問したりもしたが、公式の場で彼と会うのはあれ以来初めてとなる。

社交シーズン最初の舞踏会は、王宮で開催されるのが通例だ。デビューを迎えた貴族



の子女のお披露目のためである。

広いホールにはシャンデリアが煌めき、既に集まった人々のさざめく声が、奏でられる調べに乗ってゆらゆらとたゆたっている。

国王への拝謁を済ませたデビュタントたちは、ホールで初めての舞踏会に頬を紅潮させてあたりを見回していた。

その会場に、エグバートのエスコートを受けて、アンジェリカが姿を現す。

すると、途端にざわめきが大きくなった。

それもそうだろう。氷の王子と呼ばれる王太子が、蕩けるような笑みを浮かべているのも初めてなら、女性をエスコートしている姿を見せるのも初めてなのだ。緊張に震える指先をぎゅっと握り締めて、アンジェリカはどうにか正面を向いた。

ざわめきは二人の周囲を取り囲むばかりで、二人に直接声をかける者はいない。それだけがアンジェリカにとっては救いだ。王太子の婚約者として、みつともない姿を晒すことは避けたい。

このまま時が過ぎてほしい。毅然とした姿を保とうと背筋を伸ばすアンジェリカを見て、エグバートがかすかに笑った。

「かわいいアンジェリカ、そんなに固くならないで。ほら、もうじき音楽が始まる。一

曲どうかかな？」

「ええ、喜んで」

顔が近い。頬を染めたアンジェリカと、それを愛おしそうに見つめるエグバートの姿に、周囲からはため息が漏れた。それは、羨望か嫉妬か——はたまた別の感情か。

二人がホールの中央へゆっくりと進む。それを合図にしたかのように、デビュタントたちもそれぞれの相手と顔を見合わせ、進み出る。

やがて、姿を現した国王の手が上がると、楽団は最初の一曲を奏で始めた。

「かわいいアンジェリカ、きみはダンスの名手だね」

「殿下ほどでは」

初めて二人で踊るというのに、びったりと息が合う。軽やかにステップを踏み、くるとターンを決めた。エグバートの安定したリードのおかげもあって、アンジェリカはダンスに没頭する。こんなに軽やかに踊れたのは初めてだ。自然と笑みが零れて、緊張が薄れてゆく。

やがて曲が終わりを迎える。一曲で終えるのは惜しいが、いつまでも踊っているわけにもいかない。視線を上げ、最後の礼をとろうとすると、微笑むエグバートと目が合った。それは、今までの意地悪な笑みとも、蕩けるような笑みとも違う——アンジェリカ

が見たことのない、自然な微笑みだ。

アンジェリカの胸が、どくと音を立てる。握られた手が、そこだけ熱い。

「殿下……」

「名残惜しいけど、そろそろ行こうか」

一瞬でその微笑みをひっこめて、作り物めいた笑顔を貼り付けたエグバートがアンジェリカを促した。少しだけ残念に思ったものの、そのままダンスの輪から抜け出す。

「さて、本日のメインイベントといこう、かわいいアンジェリカ」

耳元で囁かれて、アンジェリカはごくりと唾を呑み込んだ。今日は舞踏会を楽しむために来たわけではないことを思い出したのだ。大丈夫、と言うようにエグバートがアンジェリカの腰を引き寄せる。

「それにしても、何なんですか」

「何が？」

「その、かわいい——ってやつですよ。やりすぎじゃないですか？」

「いやだな、本当のことを言っているだけだよ」

小声で交わすやりとりの最後に、唇が頬を掠める。ひや、と声をあげそうになって、ぎりぎりのところで踏みとどまった。頬が熱くてたまらない。

そんなこと、本当は思ってもいないくせによく言うものだ。自分の顔の造りくらい、自分が一番知っている。可もなく不可もない、十人並みというやつだ。アンジェリカはため息をついてから、エグバートを睨みつけた。

「そんな顔しても、かわいいだけだよアンジェリカ」

くすくす笑うエグバートに連れられて、アンジェリカはとうとうその日一番の大舞台に立った。緩い螺旋を描く階段を数歩、導かれるようにしてあがってゆく。到着すると、一礼して、エグバートが言葉を発した。

「父上」

「おお、そちらが……？ ああ、ヴァーノン伯爵の……」

「ご存知でしたか。ええ、ヴァーノン伯爵の息女で、アンジェリカ嬢です」

紹介されて、アンジェリカは礼をとった。

「ただいまご紹介いただきました、アンジェリカでございます」

「よい、顔を上げよ」

国王の許しを得て、緩やかに顔を上げる。にこやかに微笑む壮年の王は、なるほどエグバートに面差しが似ていた。いや、逆か——エグバートが王に似ているのだ。

すると、何年後かにはエグバートもこういう顔になるのだろうか。ちらりと浮かんだ

考えに、アンジェリカは内心で苦笑した。

その頃、自分たちはどうなっているのだろう。この顔になったエグバートを、近くで見ることがあるのだろうか。

浮かんた考えを、慌てて追い出す。少なくともそれは今考えることではなかった。

「アンジェリカ嬢とは、去年の仮面舞踏会で出会いました」

「ほう、そんな話は聞いていなかったがな」

国王とエグバートの会話は、どうやら二人の出会いについてのものようだ。隣に立つ王妃は、黙ってその様子を眺めている。

エグバートはあまり、王妃には似ていないのだな、とアンジェリカは思った。

「ええ、残念ながらその場では振られてしまいました。その後も、こっそりと彼女に求愛し続けていたのです」

「でっ……殿下……!」

作り話にも程がある。慌てたアンジェリカがエグバートの言葉を止めようとするが、国王はそれを聞いてからからと笑った。

「そうかそうか、なるほどな」

「ようやく受け入れてもらえて、私は天にも昇る心地でした」

「はは、それほどにか」

「ええ、私は今、この方に夢中なんです」

「まあ……お熱いこと」

それまで黙っていた王妃が、ころころと笑う。その表情を見て、アンジェリカは先程の感想を改めた。なるほど親子だ。この表情、エグバートによく似ている。——いや、ともう一度考え直す。王と同じだ。エグバートが王妃に似ているのだ。

「——エグバート、ヴァーノン伯爵には？」

「無論、お話ししてあります」

「うむ……皆の者!」

パン、と大きく手を打ち鳴らす音があたりに響く。徐々にざわめきが静まり、人々の視線が集中した。その光景に一步引きそうになったアンジェリカを、エグバートの腕が支える。

腰に回された腕の温かさに、ほっと息が漏れた。ここで無様な姿を晒すわけにはいかない。よろけそうな足に力を入れて、エグバートの顔を見る。

「この場を借りて、皆に喜ばしい発表がある」

国王の力強い声が、あたりを揺らした。エグバートに寄り添って、アンジェリカは一

歩前に踏み出す。今度は集中する視線にひるむことなく、しっかりと前を向いた。

隣に立つエグバートがそれを見て頷くと、ゆっくりと口を開いた。

「聞いてくれ。私、エグバートはヴァーノン伯爵のご息女アンジェリカと婚約をした。皆、祝ってほしい」

わっ、と歓声があがる。その場にいる全員にグラスが配られると、それぞれ思い思いに掲げ音を立てて合わせる。アンジェリカも、エグバートとグラスを合わせ微笑みを交わした。

その様子は、どこからどう見ても相愛の恋人同士だ。少なくとも、エグバートの演技は完璧だった。見破られるとしたらきつと自分の方だろう。

おかしくなって、ついくすくすと笑いだす。そんなアンジェリカを見て目を細めたエグバートが、耳元に口を寄せた。

「これでもう逃げられないよ、かわいいアンジェリカ」

「あら、逃がしてくださる気があったんですか？」

アンジェリカの言葉に、一瞬目を見開いて、エグバートが笑う。とても自然なその笑顔は、噂の「氷の王子」らしさは微塵もなかった。

## 第二話 初夜とはどんなものかしら

時の経つのは早いもので、あの婚約披露からたった三か月でこの日——結婚式を迎えてしまった。通常であれば、婚約期間を一年は設けるところだが、これまで女性に見向きもしなかったエグバートが結婚すると言い出したのである。気が変わらないうちに、と国王直々の命令により超スピードで結婚式の準備が進んだのだ。

王宮の一角に準備された花嫁の控え室で、アンジェリカは花嫁衣装に身を包んでいる。王族にのみ使用することを認められる意匠を盛り込んだドレスは、ため息が出るほど——重い。この上に、バルコニーでのお披露目にはマントを羽織るのだと言うが、それがまた重い。手に持つのだと示された錫杖も重たいし、何より頭に着けるティアラも重い。

素晴らしい衣装には違いないのだが、こんなに重くては移動するのも一苦労だ。これを着て、大聖堂の長い絨毯の上を歩くのかと思うと、それだけでため息が出る。

ふう、と息を吐いたアンジェリカを見て、侍女たちがくすくすと笑った。

「アンジェリカさま、今からそのように緊張なさっては……今日は先が長いのですから」  
 そう声をかけるのは、あの日アンジェリカを介抱してくれた侍女だ。名をブリジットという。落ち着いて見えるが、年齢はアンジェリカと変わらないというから驚いた。

そのブリジットに向かって、アンジェリカは曖昧に笑う。緊張からではなく、ドレスが重いのが憂鬱で、と言ったら彼女はどんな顔をするだろう。羨望のまなざしでアンジェリカを——いや、ドレスを眺めている彼女の夢を壊すのはしのびない。

まして、エグバートとアンジェリカの間に恋とか愛とか、そういったものが欠片もないことを知ったら。

——いまや、エグバートとアンジェリカの恋物語は、王都中の乙女たちの憧れなのだとブリジットは興奮気味に語っていた。あの伝統の仮面舞踏会で出会い、恋に落ちた二人。伯爵令嬢であるアンジェリカは、身分を気にして身を引こうとする。しかし、諦めきれないエグバートは、毎夜部屋を訪ねては愛を囁く……

それを聞かされて、笑わなかった努力だけは褒めてほしいものだ。

「……そうね、今日は一日よろしくね」

「おまかせください！」

ブリジットがどんと胸を叩いて請け合った。そのかわいらしい姿に、口元がほころぶ。

この場にいるブリジットより年かさの侍女たちも、その姿をにこやかに見守っている。いい職場だな、と素直に思う。

そこへ、部屋の扉をノックする音が響いた。はい、と答えたのは扉近くにいた侍女だ。名前は確か、ベリンダと言ったはずである。

そのベリンダが、扉の向こうの声と二三言三言交わす。振り向くと、扉を開けて兄が入ってきた。次兄のデイヴィットである。

「へえ、馬子にも衣装とはよく言ったもんだ」

「喧嘩を売りに来たの？ お兄さま」

唇を尖らせたアンジェリカの頭を、デイヴィットの大きな手が撫でた。幼少期には何度もされた仕草だが、大きくなってからはない。意外にも優しい手つきでそれを行うと、デイヴィットは目線ですぐに退出を促した。

一礼して、侍女たちが部屋を出る。おそらく侍女たちは、嫁ぐ前の最後の兄妹の時間などと考えていると思うが、デイヴィットとはこれからも顔を合わせる機会がいくらかもある。何といっても、アンジェリカの夫となるエグバートの近衛騎士なのだから。

「……お兄さま？」

「アンジェリカ。俺がこんなことを言えた義理じゃないが……殿下のこと、よろしく頼む」

その言葉に、アンジェリカは目を丸くした。普通、兄がそれを言う相手は自分ではなくエグバートではなからうか。そう思いながらも、兄の青い瞳が——アンジェリカと同じ色をしたそれが、妙に真剣だったから、戸惑いながらも頷く。

「頼んだぞ。何があっても、殿下を信じてお傍にいて差し上げてくれ」

「——はい」

その返答を聞いて、デイヴィットがほっとした表情になる。もう一度、アンジェリカの頭をぽんぽんと叩く。

「こうするのも、最後かな」

「そう、ですね」

しばし、部屋の中に沈黙が落ちた。少しだけ、しんみりとした空気が流れる。それを断ち切るかのように、デイヴィットが笑顔を作った。

「そうだ、これを一番に言わなきゃいけなかったな——おめでとう、アンジェリカ。幸せになるんだぞ」

「ありがとう、お兄さま……」

既に邸<sup>やしろ</sup>を出る時に、父母と、参列するために王都へ来てくれた長兄夫婦と同じやりとりを交わしてきた。が、それでもアンジェリカの目にじわりと涙が滲<sup>にじ</sup>む。

「ば、ばか……化粧が崩れるぞ」

「どうせ、塗っても塗らなくても変わりません」

憎まれ口を叩くアンジェリカを、困ったように見つめて兄は微笑んだ。

「ばーか。今日のおまえは——その、綺麗だよ」

ぽん、と大きな掌<sup>てのひら</sup>がもう一度アンジェリカの頭に置かれる。必死に涙を堪<sup>こら</sup>えて、アンジェリカは笑ってみせた。

大聖堂に、厳かな鐘<sup>かね</sup>の音が響く。白を基調とし、所々に金の装飾を凝<sup>こ</sup>らした大聖堂は、王宮の敷地内<sup>敷地内</sup>にあって唯一市民の立ち入りが許された場所である。

しかし、王族の——しかも、王太子の結婚式が行われる今日、さすがに市民の立ち入りは制限され、中を埋めるのは王太子の結婚に立ち会<sup>あ</sup>う栄誉を与えられた一部の貴族たちだけだ。

両側に居並ぶ貴族たちの間を、アンジェリカは父に腕を取られてゆつくりと歩く。中央では、夫となるエグバートがじっと待っている。悠然と立つその姿は、花嫁の対となるような意匠<sup>ていしょう</sup>を凝<sup>こ</sup>らした白い礼服。濃紺の礼服姿もきりりとしていたが、こちらの衣装もまたエグバートの美しさを引き立て、一点の曇りもない貴公子ぶりだ。

この方の隣に立つのか、といまさらながらアンジェリカは身震いした。結婚式の主役は花嫁だと言うが、今回に限っては新郎が主役だ。

「さあ、アンジェリカ」

父に促され、エグバートが差し出す手に、自分の手を重ねる。一度それをぎゅっと握ったエグバートが、微笑んでその手を腕へと誘導する。

「殿下——よろしくお願いいたします」

「もちろんです」

花嫁の父と新郎とが、短い挨拶を交わした。ぼん、と背中を叩かれて一歩前へ踏み出す。じわり、と胸が熱くなり、アンジェリカは振り返りたくなる衝動を必死に堪えた。

そのまま、ゆっくりと一歩ずつ、神官長の待つ祭壇の前へ歩いていく。

「エグバート・ロイシユタ。誓いの言葉を」

「私、エグバート・ロイシユタは、生涯妻アンジェリカを愛し、いかなる苦難からも守り、また、全ての喜びを分かち合うことを誓います」

神官長に促され、エグバートが誓いの言葉を述べる。

「アンジェリカ・ヴァーノン。誓いの言葉を」

「私、アンジェリカ・ヴァーノンは、生涯夫エグバートを愛し、いかなる苦難からも援

け、挫けた時は支え——また、全ての喜びを共にすることを誓います」

アンジェリカもまた、震えそうになる声をどうにか押しとどめて誓いの言葉を述べた。そのまま頭を下げ、次の神官長の言葉を待つ。静まり返った大聖堂に、神官長の声が響いた。

「二人を、神の聖名の下、夫婦と認めます。それでは兩人、誓いの口づけを」

その言葉を合図に、互いに向き合う。翠玉の瞳が、アンジェリカを優しく見つめた。どうしたことが、それだけで心臓が破裂しそうなほどに痛い。

頬に手を添えられて、ゆっくりと目を閉じる。唇にそっと触れる温かさを感じて、不意にアンジェリカは気が付いた。

——これは、自分たちが初めて交わす口づけだ。

エグバートは分らないが、アンジェリカにとってはまさに初めての口づけである。かあ、と頬に血が上って、その顔を見られたくなくて俯こうとする。

その初々しさに、周囲からは微笑ましい視線が送られた。

こうして、二人は無事に夫婦となったのである。

場所を移して行われた披露宴は、盛大なものだった。バルコニーでのお披露目の後、

重いドレスを引きずって移動した先では、今度は大勢の賓客たち（ひんきやく）がかわるがわる挨拶（あいさつ）に訪れる。それに笑顔で応えながら、アンジェリカは内心でため息をついた。

（ドレスが、重い……早く終わらないかしら……）

新郎新婦は、披露宴を中座するのがこの国の習わしである。それに従って、エグバートはアンジェリカを抱え上げると微笑んで退室する旨を告げた。

その姿は、おおむね好意的な視線で見送られる。

「重いでしょう、エグバートさま……あ、歩けますから……」

かなりの量を飲んでいたように見えたのに、エグバートの足取りは全く危なげない。しかし、婚礼衣装のドレスがかなり重いことを身をもって知っているアンジェリカは、エグバートにそう声をかけた。

「婚礼の日は、新郎は寝室まで花嫁を運ぶものでしょう？」

「それは……でも、王宮は広いですから……」

披露宴を行った広間から、エグバートの——これからは、アンジェリカも共に生活することになる——部屋は遠い。三か月の間、王宮に通って地理を頭に入れたアンジェリカは、途中で下ろしてもらおうともがいた。

「ほら、暴れない」

細身の身体はどこにこんな力があると言うのか、もがくアンジェリカを器用に押さえつけて、エグバートはどんどん進む。その表情は、楽しげですらあった。

せめて自分にできることは落ちないようにしっかりと掴まることくらいだ。首に手を回し、ぎゅっとしがみつくと、彼の身体が見た目よりもしっかりしているのがダイレクトに伝わってくる。

男兄弟しかない家庭で育ったとはいえ、こんな風に密着する機会などないに等しい。初めて感じる男の身体の硬さ、その力強さに眩暈（めまい）がしそうだ。

「さて、着いたよ」

部屋の前で控えていた騎士が、扉を開ける。今日の護衛が兄でなかったことにアンジェリカは感謝した。こんな姿を見られるなんて、想像しただけでも恥ずかしすぎる。

室内に入り、煌々（こうこう）と灯りがついた部屋をエグバートの足がつかつかと横切っていく。二つめの扉が、侍女の手で開かれた。おめでとうございます、の声にエグバートが何か答えている。しかし、既に恥（はづ）れずかしさで飽和状態のアンジェリカの耳には何といったのかよく聞き取れなかった。

その扉が静かに閉められて、途端に部屋の中が薄暗く感じる。寝室だ、と気が付いた時には、アンジェリカはそっと寝台に下ろされていた。その手つきが存外優しく、胸



がざわつく。まるで、大切なものとして扱われているようでくすぐったい。

ただ、都合がいいから選ばれただけだと頭では分かっているのに――。アンジェリカの胸が、ちくんと痛みを覚えた。

こんな風にされたら、勘違いしてしまいそうになる。

――そんなことを考えていたせいだろうか、アンジェリカは自分の置かれた状況に気付いていなかった。

「湯浴みをする？ ……と聞きたいところだけど」

エグバートの声がやけに近くで聞こえる。え、と思った時には既に端整な顔が間近にあった。アンジェリカに覆いかぶさった彼が、ちゅ、と音を立てて唇を合わせる。

後ろ頭を探っていた指が、器用に動いて結い上げた赤い髪を解く。ぱらりと落ちたそれを、手櫛で梳いた。

そのまま抱え込まれて、口づけがだんだんと長くなっていく。息苦しくて開けた口の隙間から、ぬるりと何かが侵入した。

「え、あ……!？」

アンジェリカの困惑をよそに、エグバートの舌が口腔内を蹂躪する。唾液の混じり合うぐちゅぐちゅという音が聞こえて、アンジェリカは真っ赤になった。

齒列をぐるりと舐められたかと思うと、舌の付け根をくすぐられる。唇を塞がれたアンジェリカは「ん、ん」と言葉にならない声を発した。どちらのものとも分らない唾液が喉を滑り落ち、呑み切れなかった分をじゅっと吸い取られる。その行為だけで、頭がくらくらしてきた。じわじわと、身体の奥が熱くなる。

アンジェリカとて、夫婦が間を何をするかくらいは母から教えられていた。だから、この行為の先にあるのが子作りのためのものだとは知識では知っている。

だが、それが自分とエグバートとの間で行われることは想像していなかった。仲睦まじい夫婦のふりをする以上、初夜も執り行ったふりをするだけだと思ひ込んでいたのだ。

「ま、まっ……」

「だめ、待てないよ……ほら、ちよつと腕を……」

いつの間にか、ボディスのくるみボタンが外されて、コルセットの紐まで解かれている。花嫁衣装を脱がせるのは、新郎の役割だとはいうけれど、これは何かが違っている気がする。

少なくとも、こんな行為をしながら脱がせる伝統はないだろう。

そんなことを考えている間に、持ち上げられた腕からドレスが引き抜かれる。性急に覚えて、丁寧な所作に育ちの良さが窺えた。

ただ、それとは裏腹にエグバートの視線は熱い。煮えたぎるような欲を孕んだ翠の瞳がアンジェリカを捉えて離さない。掠れた声に、少し乱れた礼服。いつの間に取ったのか、白いタイが床に落ちている。その上に、アンジェリカの着ていたものがばさりと落とされた。次いで、わずらわしうに脱ぎ捨てられたエグバートの白い礼服が重なる。肌着をめくりあげられて、白い胸が露わにされた。はあ、と熱い息を吐いたエグバートがじっとそこを見つめる。

「綺麗だね」

「な、何を―――」

ぼつりと落とされた言葉に、アンジェリカの顔が熱くなった。この状況だけでも耐えがたいのに、そんな感想を言われるなど、頭がおかしくなりそう。思わず反論しようとした時、エグバートの指が膨らみを撫でた。つつ、と滑る指の感触が生々しい。

「は、柔らか……」

遠慮がちだった動きが次第に大胆になり、ついには掌で揉むようにして乳房の形を変えてゆく。持ち上げたり、揺らしてみたり、まるで好奇心を満たす子どもみたいに夢中だ。ひとしきり感触を楽しんだエグバートが、今度はその先端へと口を寄せる。

「は、あ、あっ……」

ぱくり、と食いつかれて、唇でむにむにと挟まれる。舌先が遠慮がちにつんつんと先端をつつく。その刺激に、アンジェリカはたまらず声をあげた。

その反応に、口角を上げたエグバートが、もっと大胆に先端を舐めあげ、時折吸い付いてくる。気付けば、反対側の先端は指先で摘まれ、くにくにと捏ねられていた。

「あ、ん……っ、あ、あ、いや、なんか、へん……っ」

「ん、かわいい……」

刺激されるたび、身体中がしびれてゆく。全ての感覚が、胸の先に集まったかのように敏感になって、与えられた刺激を余さず拾おうとする。

それだけではない。触れられてもいない、お胎の奥がうずうずと未知の感覚を伝えてくる。それをどうにかやり過ぎたくて、アンジェリカは身じろぎした。

「ふふ、かわいい……かわいいアンジェリカ、ほら、腰が揺れている。素直でいい身体だね」

それに気付いたエグバートが、からかうように口にする。まるで、淫らな女だと言われたような気がして、アンジェリカは首を振った。青い瞳に、じわりと涙が浮かぶ。

それをべろりと舐めて、エグバートが妖艶に笑った。

「いいんだよ、アンジェリカ。もっともっと、乱れたきみが見たい」

そう告げた手が腰を撫でる。アンダースカートと、重ねられたパニエをするりと引き